

# 観 察

## いわゆる「農業・農村の多面的機能」について

研究所長 七戸 長生

近年しきりに、農業・農村の持つ多面的機能に言及した議論がかわされている。

例えば昨年六月に出された「農業基本法に関する研究会報告」では、基本法が制定された当時は主として農産物の供給という面であらえられていたが、その後の我が国経済社会の変化の中で、国土・環境保全機能、景観保全機能、教育的機能、アメニティの創出、地域社会維持等の社会的機能、歴史文化保存機能といった多面的な機能が外部経済効果として認識されるようになった」と述べて、今後どのようにすれば国民がこのさまざまな機能を実感として理解し得るようになるかを検討しなければならないと指摘している。

実は、こういった論調の口火を切ったのは、平成四年六月に打ち出された「新しい食料、農業・農村政策の方向」（いわゆる新農政）であった。これと前後して、地球温暖化、熱帯林の消失、砂漠化の進行、酸性雨、オゾン層の破壊などといった地球規模での環境問題の深刻化が国際的に注目されていたが、これをふまえて「国土・環境を保全していくためには、国民のコンセンサスを得て、まず食料の持つ意味、農業・農村の役割を明確に位置づける必要がある」という政策命題が示されたのである。

しかしこういった重要な問題指摘にもかかわらず、農業・農村の持つ諸機能を高く評価する国民的なコンセンサスは、一向に盛り上がりついていないように思われる。それは一体、何故であろうか。そこには、次のようないくつかの原因が複雑に関連しているのではなからうか。

まず第一に、農業・農村の持つ多面的・公益的な機能についての、組織立った強力なキャンペーンが展開されていないこと。その根底には多面的機能そのものとのらえ方が、極めて観念的なレベルにとどまっていはしないか。第二に、もしその機能をよりリアルにとらえらるゝとしたら、その方法にももう少し工夫の余地があるのではないか。例えばその機能はどのような要因によつて、どのような年次のな消長を示す性質を持つているかといった定性的な吟味。第三に、これらの機能の存在を急激な国際化の流れに対する国内農業保護の根拠にしようとする「戦略」は、いかにも付け焼き刃のようではないか。何故なら、この多面的機能は、急いで保護しなければ死滅するような、衰弱しきつた頼りない農業・農村からは、到底もたらすことができない働きではないかとみられるからである。

これらの点でふと頭をかすめるのは、一九八〇年代以降の

ヨーロッパ諸国における「緑の党」の躍進的な成長ぶりである。当初はいささかラジカルな反公害の市民運動とみられていた動きが、今や二大政党対立のはざまについて第三勢力の一角を形成するまでに至っている。都市化・工業化の流れの中で、自然保護を旗印とする市民運動の盛り上がりだが、農業・農村の公益的機能の重視につながっていく可能性を示唆しているかもしれない。

わが国でも、このような消費者運動や市民運動の盛り上がりを期待するとしたら、どういうことが課題となっているか。

まず第一に、農業・農村の実情が一般市民にあまりにも知られていないという事実を、深刻に反省する必要がある。それは高度経済成長期以来の二〇〜三〇年間に亘って、ことあるごとに繰り返されてきた農業批判、農村蔑視の観点を、どうやって一八〇度転換させるかという難問題ともつながっている。したがって農村の側からの働きかけを工夫することも大切だが、その反面からのアプローチも有力であろう。つまり都市住民の生活実態に即して、経済大国と呼ばれるような基盤の上に、一体、どのように健全で、心豊かな内実をもった都市化の生活を築き上げているかを点検し、そこに欠けているものが何なのかを農村の人々と共に明らかにしていく作業である。そこで、彼らが消費する食品の安全性や家族一人一人の健康状態・活動状態を見つめながら、本当に心豊かですばらしい生活とはどういうことを考えることを通じて、おのずと農業・農村の機能についての再評価の観点が成熟し

ていくに違いない。このことを通じて「農村が都市よりも劣っている」という、いわれなきコンプレックスの脱却も可能になる。

第二に、こと農業・農村に関していえば、過去の賛美はほどほどにしたい。農業・農村の多面的機能と呼ばれているものを数えあげると、一国の産業の大半を農業が占めていた封建時代の農業・農村が持っていた機能を羅列することになりかねないが、それはいささかピン・ボケの議論になる。

例えば制定以来三六年を経過した農業基本法の、格調高い前文を想起してほしい。それはこう書かれている。「我が国の農業は、長い歴史の試練を受けながら国民食糧その他の農産物の供給、資源の有効利用、国土の保全、国内市場の拡大等国民経済の発展と国民生活の安定に寄与してきた。また農業従事者は、このような農業の出来ない手として、幾多の困難に堪えつつ、その努めを果たし、国家社会及び地域社会の重要な形成者として国民の勤勉な能力と創造的精神の源泉たる使命を全うしてきた。」

だが、その後の農政は、これらの多面的機能の中の、食料供給機能の近代化に集中的に専念することになり、その結果として今日のような農業・農村の窮状が現れているのである。したがっていま私達が注目すべきことは、今後のわが国の国民経済の行方を見据えて、一般市民の生活のために求められている農業・農村の多面的機能とは何か、を根本的に検討することであろう。